

渋沢危篤と羊羹の金魚

櫻園通信 74 令和4年3月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

宮本孝一 老年学情報センター



明治三十六年十一月、渋沢栄一（当時六十三歳）は感冒を発症しました。風邪気味で具合が悪く、日本銀行で催された会議に欠席の電話連絡をしたあと、王子の別荘で寝込んでしまします。

当時、渋沢の本邸（兜町）は事務所などに使われており、明治三四年から王子の別邸が家族と過ごす生活の場となっていました。

渋沢栄一の病気は「渋沢栄一伝記資料」第二十九巻ではインフルエンザと記されています。

明治三十六年十一月二十日

是日栄一、インフルエンザニ罹リ喘息ヲ併発ス、次イデ中耳炎ニ変ズ。十二月一日鼓膜切開ノ手術効ヲ奏シ稍快方ニ向フ。（渋沢栄一伝記資料 第二十九巻一三四一三八頁）

喘息と中耳炎も発症。十二月には耳を手術したようです。



この時、大塚にあった養育院ではハンセン病を患う収容者の増加が悩みの種でした。

養育院医員に就任した光田健輔がハンセン病が感染症であることを渋沢や幹事安達憲忠に説明し、明治三四年に患者を隔離する病室「回春室」を設けたのですが、ハンセン病の収容者が増えて回春室はすぐいっぱいになってしまいました。

渋沢栄一は安達や光田たちと相談し、インフルエンザからまだ完全に回復していない三七二年二月、ハンセン病患者専用の収容所の設置を尾崎行雄東京市長に願いました。

しかし、東京市からはいつまでたっても何の返答もありませんでした。



三月に入り、体調が回復しない渋沢栄一は転地療養のため国府津（小田原市）の旅館国府津館に移りました。転地療養は四月二四日の帰京まで続きました。

その帰京直後、肺炎を発症。ついに危篤状態に陥ります。見舞いに訪れた徳川慶喜は渋沢の手を握って涙したといわれています。

渋沢栄一に回復の兆しが見えたのは六月にはいつてからでした。

去月二十一日頃迄の先生の病状は甚だ氣遣はしき容態を呈せられ、高

木博士・土屋学士等毎日往診し、外に医員は交る交る終夜病床に侍し、

看護婦も四名を備ひ、僅に嚙下し得るものは流動物に過ぎざりしも、薬

餌漸く効を奏し昨今は大に輕快に向ひ、高木博士の往診も隔日となり、

医員も常に詰切り居らず、看護婦も二名を減ぜられ、先生には時々褥上

に座して庭園を眺め、食餌も粥を用ゐらるゝに至り(略) (竜門雜誌

第一九三号・第三九一四〇頁 明治三七年六月)

六月上旬はまだ熱が下がらず病床に伏していました。そんな六月九日、明治天皇より見舞いのお菓子一折が届けられました。渋沢栄一はたいへん感激し、なんと病床を出て礼服に着替えたようです。

男爵には床上に起なおり、礼服を取寄せて恭しく天恩を拝謝し、暫し感涙に咽はれたり。(中外商業新報

第六七三三号 明治三七年六月一四日 渋沢男の輕快)

さらに、その場で渋沢は筆を取り寄せ、歌を一首詠みました。

伏屋もるうめきの声の思ひまや
雲の上まてきこゆへしとは

この日以降、渋沢の容態は快方に向かいます。

六月一八日、渋沢栄一は養育院のハンセン病患者を目黒の私立慰癪園に依頼する方針を立て、尾崎東京市長に上申しました。

今度は尾崎市長はすぐに対応し、依頼費用を予算予備費より補充する旨の指令を二二日に出しています。

七月に養育院のハンセン病患者十人が目黒慰癪園に移され、養育院のハンセン病患者の収容状況は少し改善しました。

そのころ渋沢は、庭園に出て歩けるほど回復していました。



さて、六月に明治天皇より渋沢に贈られたお見舞いとは、どんなお菓子だったのでしょうか。

和菓子の老舗とらやのホームページによると、羊羹でできた金魚が二匹、四角い寒天の中に浮かんでいる美しいお菓子で、とらやの「蟬の小川」という和菓子だったようです。(渋沢栄一と虎屋の菓子 <https://www.toraya-group.co.jp/toraya/bunko/historical-personage/020/>)



想像図